令和６年度

一般選抜（Ⅰ期）問題

試験日　２月１日

国　　語

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

注意事項

① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
② 開始の合図後、解答用紙に「氏名」、「個人番号」を記入すること。
③ 受験票、筆記用具以外は、机上に置かないこと。
④ 受験票は机上に貼付してある「個人番号」の手前に置くこと。
⑤ 記述解答で、字数の指定がある問題では句読点は１字として数えること。
⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
⑦ 試験中は退席しないこと。（気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること）
⑧ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

〔一〕　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

(1)日本人はよく議論下手だといわれます。西洋、中国人に対して常に負い目になっていることの一つです。実際、英語を学ぶ、あるいは論理的な言葉を学ぶときに、コンプレックスにも(a)ツナがっています。

私は留学した関係で四か国語を話しますが、西洋の言葉を使うときには、西洋人の気持ちになって話すようにしています。その国にいたとき、留学体験を思い出しながら、話すようにしているわけです。実際、そういう気持ちにならないと、議論もできないし、コミュニケーションもはかれません。

逆にいえば、議論するというのは、そういう体験が必要だということです。語学を習得するだけではだめです。留学して言葉を体得し、さらにその国の思考方法というか、その国の論理性を身に付けて初めて議論が成り立つわけです。

日本人の議論下手を(b)コクフクするには、かなり長い期間にわたって留学させることです。知的な青少年にそういう機会を与えなければ、日本の議論をリードするエリートをつくることはできません。ぜひ文部科学省にはそのあたりを考えてほしいと思います。

一方、英語教育を若いときからはじめるということには私は反対です。日本語の言語感覚を身に付けない前に、別の言語を学ぶというのは不自然です。どちらの言葉も中途半端になってしまいます。これはこういうことです。日本人は、主体は原因ではなく、結果だと考えているからです。ということは、主体の判断は最後にするのです。日本語の構造でもわかるように、[A]は最後にきます。西洋語は主語の後、すぐに置かれます。それは日本では、自我というものが共同体の中で発揮されるものだと考えているからです。

そうした論理構造を、まず身に付けないと、英語を学んでも中途半端な人格になるだけです。

日本の言語感覚を身に付けた上で留学をする。それが日本語と(c)タイショウテキな西洋語を理解するためには必要で

す。カルチャーショックがあって初めて他国の考え方を受け入れられるのです。日本人のままで議論しようとしても、相手の国の人たちと議論が成り立ちません。日本語で議論の思考方法を身に付けさせた上で、相手の言葉で議論する。それで初めて噛みあうわけです。また日本人の考え方で短い言葉で表した俳句のような、あるいは和歌のような言葉でいっても議論になりません。

評論の大家といわれた(2)小林秀雄は、実をいうと西洋ではほとんど読まれていません。彼の論理が日本的だからです。三島由紀夫の作品は、海外で翻訳しやすいということがいわれます。村上春樹も同じです。(3)グローバリゼーションに即した文学と評価されています。表現が人工語的といってもいいかもしれません。

論理的なはずの小林秀雄がなぜ翻訳されにくいのでしょうか。論理を基調とする評論において、ベルクソンやバレリーを評論している小林秀雄でもです。

逆に禅的なもの、日本の伝統的なものを表現する哲学者系統が読まれているように、西洋では中途半端な思考方法を取る文学者は評価されないのです。

いずれにしても日本の哲学や禅など、西洋とは完全に(d)タイキョクに立つような考え方が注目されるだけで、日本の思想家がいないということが一般的にいわれるのは仕方がないことです。

(4)日本は元々論理性を拒否してきました。それが神秘でないと知っている民族といってもいいと思います。思考力がない、論理がないというのではありません。和歌や俳句のように、すぐれた芸術表現ではあってもそこに論理は生まれてこなかったわけです。整然とした体系を生まない日本人が、議論下手になるというのは当然といえます。

だからといって日本人に論理がないわけではないのです。ただ一神教的な一神―人間―一主張という図式をとらないだけのことです。自然―人間―主張という図式には決して独断はありません。ロゴスの(e)ダラクはないのです。(5)自然―人間が主体ですから、それに自然科学の追求も含んでいます。日本の科学者の目覚ましい活躍はそのことを示しています。直観や経験、実践を重んじロゴスは重んじないのです。

日本人は「理性」や「哲学」の思惟の自律性を認めません。それは誤りに導かれるだけです。「マルクス主義」の二十世紀の失敗はそれでした。いや実をいえば、一神教―ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の誤りを明確にいえるのも日本人だけといってもいいでしょう。それは自然の多様性を、一つの信仰の形で信頼し、人間もその一部として許しあっているからなのです。それが神道―自然道をもつ日本人の姿なのです。

（田中英道『日本の宗教』による）

問1　傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字に直しなさい。

問2　[A]に入る最も適当な語句を答えなさい。

問3　傍線部(1)「日本人はよく議論下手だといわれます」とあるが、その理由を、筆者は日本人の特性から何だと言っているか。本文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問4　傍線部(2)「小林秀雄」の作品を次から選び、二つ記号で答えなさい。

ア　『海辺のカフカ』　イ　『無常といふ事』　ウ　『夕鶴』　エ　『仮面の告白』　オ　『本居宣長』
カ　『忍ぶ川』　キ　『海辺の光景』　ク　『氷壁』　ケ　『父帰る』　コ　『暗夜行路』

問5　傍線部(3)「グローバリゼーション」の言い換え語（訳語）を答えなさい。

問6　傍線部(4)「日本は元々論理性を拒否してきました」とあるが、同じような意味を表現している一文を本文中から探し出し、始めの五字を抜き出しなさい。

問7　傍線部(5)「自然―人間が主体ですから」とあるが、筆者はそれを何と言っているか、本文中の語句を用いて、二十字以内で答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

現在の出版業界は前世紀末以来の長期にわたる売上低迷にもがいているという。その一方で（だからこそと言うべきか）、[X]本の出版数は年間七万を超えるまでに増えているというから、これはもうひとりの読者がどんなに頑張っても読み尽くせはしない。読者のみなさんがリアル書店であれ、ネット書店であれ、店先をぶらぶら徘徊するだけで、山ほどの本が手招いてくる。世界は本に満ち溢れている。これはまぎれもない事実だ。

しかし、一読者にとっては、この日本で毎年何万冊の[X]本が出ようが、その何百倍もの既刊本があろうが、実際に手にして読もうとするのはその中のほんの一部だろう。自分が選んだ一冊の本をどのように読むかはすべての始まりであり、次へのステップでもあり、すべての終わりでもある。

それにしても、手にした本が予想に反して「難しすぎてわからなかった」とか「とても読み通せなかった」という経験をした読者はきっと少なくないのではないだろうか。たとえば、ある分野の専門書・学術書と呼ばれる（たいていの場合とても高価な）本の中には一般読者を無慈悲(a)にも拒絶するような内容の本が少なくない。研究者であるはずの私でさえ、専門分野がちょっとでも異なると手にしたとたん〝即死〟という専門書は今でもある。学問の世界の最先端はそういうものだ。その一方で、「本を読む」という行為は容易には理解できないのではないだろうか。文字列と行間にどこまで踏み込めば、その本を「読んだ」ことになるのか。その深みと広がりにとまどうこともあるだろう。ありとあらゆる本が出回っている中で、ある読者が手にした本に対して「読んでおもしろかった」とか「やや物足りなかった」という感想をもつとしたら、それは読者にとって幸せなことかもしれない。なぜなら、読後の感想はその本をとにもかくにも読み終えて初めて口にできることだからだ。

だからといって、自力で読了できた本をあなたはほんとうに「読んだ」といえるのだろうか。その本のいったい〝何〟

を読んだのか。「そこに書かれている文字を読んだ」というのでは〝読んだ〟うちには入らないだろう（外国語の本なら別だが）。その本に書かれた文章の内容をしっかり理解した上で、著者の言わんとする主張に対して思考をめぐらすことができて初めてその本を〝読んだ〟ことになるのではないか。

単に上っ面だけの「文字の読み取り」とより深い「主張の読み解き」では、同じ「読む」行為ではあっても、そこには大きなちがいがあるだろう。(1)両者のちがいを知るためにこんな例を最初に挙げよう。

陶淵明「雑詩（其一）」

人生無根蔕、飄如陌上塵。〔1〕
分散逐風轉、此已非常身。〔2〕
落地爲兄弟、何必骨肉親。〔3〕
得歡當作樂、斗酒聚比鄰。〔4〕
盛年不重來、一日難再晨。〔5〕
及時當勉勵、歳月不待人。〔6〕

いきなり漢文を出して申し訳ないが、ここでは「本を読むこと」を「漢文を読むこと」に置き換えてみてほしい。多くの読者にとって、漢文はたとえ高校時代に少しは勉強したことがあっても、卒業してしまえば学んだ記憶なんぞとっくに薄れているだろう。

中国の大詩人である陶淵明（３６５〜４２７）の手になるこの五言詩の全体を見たことがある人は少ないかもしれない。初めてこの漢詩を見たとき、ひとつひとつの漢字が読めたとしても、漢文としてその意味を読み取れるわけではな

い。

しかし、この漢詩の最後の行〔6〕の後半部分である「歳月不待人」だけは「歳月人を待たず」という有名な日本語の格言として今でも広く知られている。読者もきっとどこかで聞いたことがあるだろう。中国語としての漢文「歳月不待人」は、適切な〝返り点〟を配置し、日本語として書き下すことによって「歳月人を待たず」と読むことができ、その意味を初めて理解することができる。この「歳月人を待たず」と書き下された文を、中国文学者・青木正兒（まさる）は「歳月（としつき）は人を待つてはくれぬ」と訳した。その意味するところは現代の私たちにとっても自明なほど明らかだ。

書かれた文字を読み取り、つづられた文章を読み解き、その意味を理解する——漢文を読むときも、そして本を読むときも、私たちがいつもしていることは簡単に言えばこれだけだ。しかし、そこには大きな〝落とし穴〟(2)が潜んでいることに注意を向けよう。

この漢詩の「歳月不待人」を含む最後の二行（〔5〕と〔6〕）を青木は次のように書き下している。

〔5〕盛年　重ネテ來（キタ）ラ不（ズ）、一日　再ビ晨（シン）ナリ難（ガタ）シ。
〔6〕時ニ及ンデ當（マサ）ニ勉勵スベシ、歳月　人ヲ待タ不（ズ）。

この漢詩を通俗的な一種の〝人生訓〟としてありがたがるならば、その解釈はきっとこんなふうになるだろう（私訳）。

〔5〕若い時代は二度とは来ない　一日に朝が二度くるわけがない。
〔6〕時期を逸せず(b)勉強（仕事）に励め　歳月人を待たず。

「無駄な時間を過ごしたりせず、しっかり勉強し、仕事をしないと、年月はどんどん過ぎ去ってしまうぞ」――いかにも勤勉な日本人に受けそうな〝教訓〟的かつ〝強圧〟的な解釈だ。

ところが、青木はこの同じ二行に対して、正反対の意味をもつ次のような訳文を当てている。

〔5〕若い盛りは二度と來ぬ　一日に二度の朝が有るわけはない。
〔6〕時に後れず、せい出して遊ぶべきだ　歳月は人を待つてはくれぬ。

あれあれ、こりゃまさに〝卓袱台返し〟の逆転の解釈である。つまり、彼によれば、元の漢詩の「勉勵」とは勉強や仕事を頑張ることではなく、まったく逆に、せいいっぱい行楽と遊興に励むことだと快楽至上的に解釈される。この両解釈の根本的なちがいはいったいどうしたことだろう。

青木はこう指摘する。確かに最後の二行（〔5〕と〔6〕）だけを見れば「教訓詩」のように読めるかもしれない。しかし、それに先立つ前半部分（〔1〕～〔4〕）を踏まえれば、まったく異なる解釈になるという。

その前半部分を彼は次のように訳している。

人間はしょせん何のつながりもなくばらばらにこの世に生まれてきたのだから、たまたま兄弟だったり血縁者だからといって格別に親しくなるわけではない。楽しいことがあるのなら、近在の他人であってもみんな集めて酒をともに呑もうよ――青木によれば、この先行部分があるからこそ、陶淵明のこの詩はけっして「教訓詩」などではなく、中国伝統の「無常觀的快樂詩」のひとつと解釈するべきだと言う。

読むという行為には大きな〝落とし穴〟があると私が言ったのはまさにこれだ。「歳月不待人」という漢文をたとえ私たちが読み下せたとしても、そのほんとうの意味や背景まで読み解けたわけではない。ほんのわずかな部分だけを見て、性急に全体の意味を理解しようとすると、前に指摘された思わぬ〝落とし穴〟にはまってしまうことがある。すでに読み終えた部分からまだ読み終えていない全体について何かを推論することはつねにまちがいを犯すリスクを背負っている。

陶淵明の漢詩は字数で言えば計六〇字という極小の〝ミクロコスモス〟だった。一方、私たちが日ごろ手にする本は、それが薄い文庫本であろうが分厚い専門書であろうが、その漢詩の何千倍あるいは何万倍もの文字数があるだろう。しかし、書かれた文字数が多いか少ないかは実はたいした問題ではない。

読書とはつねに「部分から全体への推論」である。本の読み手は、既読の部分を踏まえて［Y］である本全体に関する推理・推論をたえまなく問い続ける。その推理・推論の対象である〝全体〟とは、その著書から読み取れる著者の主張を解釈することだったり、ある著者が(c)依拠する知識体系を包括的に理解することだったりするだろう。

本を読みながらあれこれ考えをめぐらすことは、リラックスして読める本ならばとても楽しい読書体験となるが、根を詰めて学び進めなければならない本だとときにつらい読書修行となる。読みながらものを考えることは、はたして「ユーレカ！」のひらめきをもたらしてくれるのか。それとも「［Z］」なのか。部分から全体への推論は首尾よく進められたのか、それとも単なる〝誤読〟に終わってしまったのか。

私たちは本を選ぶ際、無駄に時間を食う〝手間のかかる本〟を避けて、素早く楽に読めてすぐ役に立つ本だけを手にしたいと思ってしまう効率主義の(d)餌食になりやすい。「なんてったって現代人は忙しいからね」などと小賢しい言い訳はいくらでもつけられる。確かに、世の中には読みやすさ第一を標榜する〝流動食のような本〟が溢れかえっている。読書の効率こそ至上と言うのであれば選書の選択肢には事欠かないだろう。いっそのこと本を丸ごと一冊読まなくても

すむような〝要約アプリ〟を使えば、もっと効率化できるだろう。さらにいえば、そういう手間すら惜しいなら、適当なキーワードを手がかりにネットで〝ググれば〟あるいは周囲の誰かに訊けばもっと気楽に生きられるだろう。しかし、(3)必要な〝栄養素〟だけ効率的に摂取できる〝流動食〟に慣れてしまうと、気がつかないうちにものごとを考えぬくための基礎的な知力が(e)衰えてしまうだろう。

（三中信宏『読書とは何か　知を捕らえる15の技術』による）

問1　傍線部(a)～(e)の漢字の読みを平仮名で答えなさい。

問2　空欄 X には「既刊」の、空欄 Y には「既読」の対義語が入る。漢字で答えなさい。

問3　空欄 Z に入る最も適当な語句を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　下手な考え　休みに似たり
イ　下手の考え　休むに似たり
ウ　下手な考え　休むに似たり
エ　下手の考え　休みに似たり

問4　傍線部(1)「両者のちがい」について、本文の語句を用いて簡潔に説明しなさい。

問5　傍線部(2)「落とし穴」とは何か。本文中より三十五字以内で抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問6　傍線部(3)「必要な〝栄養素〟だけ効率的に摂取できる〝流動食〟に慣れてしまう」とあるが、「栄養素」、「流動食」が指す内容を本文中の語句を用いて、答えなさい。

問7　筆者が考える「読書」とは何か。本文中より十字で抜き出し、答えなさい。

以下余白